

---

# 変奏と変装

—Transparent Things の固有名詞—

中田 晶子

## 要 旨

Vladimir Nabokov (1899-1977) の晩年の中篇小説 *Transparent Things* (1972) において、物語の背景や地下に隠れ、互いに関連し合っ秘かに重要なテーマ群を形成する要素の一つである固有名詞に着目し、どのように機能しているかを考察する。中心となる固有名詞は、Hugh Person と Julia Moore である。それらがヴァリエーションを生み出し、時には他の作品と間テクスト的な関係を作りつつ、小説内にテーマを作り出し、プロットを動かし、場面の意味を明らかにすることを示す。

## はじめに

*Transparent Things* (1972, 以下 TT) は、Vladimir Nabokov (1899-1977) の晩年に書かれた小説であるが、中篇と呼ぶべき長さにも関わらず、全作品中で一二を争う難解さを備えている。表面において進行する主人公を中心にした物語の下で秘かに発展し、時には互いに関連し合う「物語の奥にある物語」<sup>1)</sup>があるからである。それら隠されたテーマ群については、これまでに3篇の論文<sup>2)</sup>を中心にまとめてきたが、まだかなりの事柄が論じられずに残っている。本稿では固有名詞を中心にいくつかのテーマについて論じる。

## 1. Person, Peterson, Peter

この作品の一つの特徴として、人名や地名が名前としての存在を超え、様々な形に発展し、それらが関連してテーマを形成することがあげられる。主人公の姓である Person, その派生源である Peterson, さらに小説内で重要な役割を与えられている, Peterson から発展した Peter について、作品内でどのように機能しているかを振り返ることとする。Peter については拙論「物語の地下水脈」の「石の話」セクションでも触れているが<sup>3)</sup>、本稿では不足していた情報を補い、改めて論ずることとする。

主人公の名前としての Person は、第 1 章を除くすべての章に登場し、第 1 章では主人公を指示する普通名詞としての person として冒頭に登場する。普通名詞としての person の語源は、ラテン語の persona であり、仮面や役柄、劇や小説における登場人物を表す言葉である。主人公の姓を Person とすることにより、彼がこの小説内の一登場人物に過ぎない存在であることをことさらに示している。“Here’s the person I want. Hullo, person! Doesn’t hear me.” (1) (「お待ちかねの<sup>パーソン</sup>の人がやってきた。やあ、そこの人！聞こえていないらしい。」5 頁)<sup>4)</sup>という呼びかけを含む話者不明の語りで始まる小説の冒頭がさらにその事実を強めている。この呼びかけの主体が誰であるかは、小説内では明かさず、最後まで謎として残る。“Hullo, person!” は、音声として聞けば、“Hullo, Person!” のように名前を用いた呼びかけに聞こえるところだが、テキストでは故意に「person = 登場人物」の線をくずしていない。英語の person が不特定の人を示す言葉として使われることから、person に everyman の意味を与えているとも考えられる。第 12 章で、主人公のファーストネーム Hugh が、フランス語を母語とするために H 音の発音が困難な恋人によって you のように発音されることにより、Hugh Person という名前の持つ「一般的な人間、不特定の everyman」の意味がさらに強められることになる。

第 2 章は、スイスのリゾート地 Trux (Nabokov が晩年を過ごした Montreux

がモデルとされる)を再訪した主人公がタクシーから姿を現す場面で始まり、主人公が初めてフルネームで呼ばれる。同時に彼の姓 Person の起源が追加の情報として括弧内で語られる。“As the person, Hugh Person (corrupted “Peterson” and pronounced “Parson” by some) extricated his angular bulk from the taxi [...]” (3) (そこの人たるヒュー・パースン(「ピータースン」が転化した名前であり、人によっては「パアスン」と発音する)は、[中略] タクシーを降りようとして、ごつごつした身体を曲げ [後略], 7 頁)。

第 10 章では主人公自身によって自己紹介的に姓の由来に関する説明がなされる。

“[...] I don’t think you met Mr. Tamworth. Person, pronounced Parson; and Tamworth: like the English breed of black-blotched swine.”

“No,” said Hugh, “it does not come from Parson, but rather from Peterson.” (31)

[[前略] たしかきみはタムワースとは初めてじゃないかな。こちらがパースン、パアスンと発音する、それからこちらがタムワース。黒い斑のある英国産の豚と一緒にだ]

「違いますよ」とヒューが言った。「パアスンから来てるんじゃない、むしろピータースンのほうで」 (50-51 頁)

第 2 章の冒頭で語られる括弧内の情報は、第 10 章の Hugh の話が元になっていることから、それを語っている人物は第 10 章で Hugh と話していた Mr. R か Tamworth のどちらかである可能性が大きいことになり、「語り手は誰か」のヒントにもなっている。Hugh の言うように、Person という姓の由来の一つが Peterson にあることは、*Dictionary of American Family Names* 等の辞典でも確認できる情報<sup>5)</sup>であり、Hugh Person という名前は、You Everymanであることを示すために人工的に作られた名前のように見えるものの、必ずしもそうではないことがわかる。

Person の派生元の姓 Peterson により、語源を石に持つ名前 Peter から小説内の石のテーマへのつながりが生まれている。ラテン語では Petero, ギリシ

ア語の「岩」(petros)を原義とする名前で、キリストの最初の弟子であり、後にキリストからキリスト教会の礎の役目を与えられたとされる聖ペトロの名である。「マタイによる福音書」第16章第18節において、神の子キリストへの信仰告白をしたペトロにキリストが告げる。「わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。」<sup>6)</sup>「陰府の力」以下のキリストの言葉は、この小説の主題である死後の生の問題に直接関わるものと読むことができる。

第1章では、謎の語り手が、現実性の薄膜を破らないようにと忠告する。章が進むにつれて見当がついてくることだが、この小説の語り手(たち)は、死後の世界から、時間的にも空間的にも制限を受けず、自由に人物や物の中にはいり込み、過去から未来に至るまですべてを観察することができるらしい。語り手は初心者に対して現在を超えて観察しようと試みる危険について忠告するが、その中に、水の上を歩く行者が比喻として登場する。

A thin veneer of immediate reality is spread over natural and artificial matter, and whoever wishes to remain in the now, with the now, on the now, should please not break its tension film. Otherwise the inexperienced miracle-worker will find himself no longer walking on water but descending upright among staring fish. More in a moment. (1-2)

自然および人工物の表面には直截な現実性という薄い膜が張られているので、現在の中に、現在と共に、現在の上にとどまろうとする者は、どうかその張りつめた薄膜を破らないでもらいたい。さもないと未熟な行者は、水の上を歩いてたつもりなのに、気がつくと、驚いて見つめる魚たちの中に直立したまま沈んでいくことになる。(6頁)

聖ペトロが自ら希望し、キリストの命を受けた形で実施した水上歩行のさなかに不安を感じ、湖に沈みかけたエピソードへのアリュージョンを未熟な行者の比喻に見ることができるだろう<sup>7)</sup>。

すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の

上を歩いてそちらに行かせてください。」イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。（「マタイによる福音書」第14章第28節-31節）

聖ペトロのイメージを借用した比喩はあっても、Peter や Peterson という名前を持つ人物が実際に登場する場面は、小説内に存在しない。既に見たように、「Person は Peterson から派生している」という説明が、小説内で二度、語り手と主人公によってそれぞれなされるのみである。このように Peter や Peterson の名は、作品内に様々な形で現れる石の小主題のヴァリエーション—アルプス、重力、高所からの落下等も含む—を生み出し、Person とのつながりを作り出している。Peterson は、本来は「Peter の息子」を意味する父称であるが、語源から「petros（石）の息子」とも考えられる。父親と Hugh をつなぐものとして、石が登場する悪夢がある。巨岩から細粒まで様々な大きさの石が夢を見ている二人をそれぞれに悩ませるといふものである。小説内には「父と息子」の主題があるが、そこにも石の小主題との関連により成立している部分が見られるのである<sup>8)</sup>。

## Moore 一族再考

Moore については、かつて拙論「物語の地下水脈—*Transparent Things*」の最後で「ムーア一族」のセクションタイトルの下、1頁ほどにまとめて簡単に紹介している<sup>9)</sup>。そこでは、Moore 名を持つ人物や施設、Moore に関わるイメージや Moore から派生したテーマが作中に見られることの指摘にとどめたが、ここでは、それらを含めた Moore に関連する事項について詳しい論考を行い、Moore の主題が小説の前景と後景においてどのように展開し、他の主題と関連しているかを示すこととする。

Moore の名前を持つ人物から始めよう。Moore 姓の人物で実際に小説に登場する人物は 2 名、Julia Moore と Jack Moore である。他に Julia の母 Marion もおそらく娘と同じ Moore 姓と思われるが、この人物は他の登場人物同士の会話に登場するのみであるため、詳しいことが不明である。

## 1. Jack Moore

小説に初めに登場するのは、Jack Moore である。第 7 章は、Hugh が子供時代から患っていた夢遊病に関する 2 頁の短い章であるが、Hugh の最後の夢遊病の発作が大学時代に起き、学生寮でルームメイトだった Jack が暴れる Hugh を押さえつけて発作を鎮めてくれたというエピソードが語られる。

This was when Hugh attended college and lodged with a fellow student. Jack Moore (no relation), in two rooms of the newly built Snyder Hall. Jack was awakened in the middle of the night, after a weary day of cramming, by a burst of crashing sounds coming from the bed-sitting room. He went to investigate. Hugh, in his sleep, had imagined that his bedside table, a little three-legged affair (borrowed from under the hallway telephone), was executing a furious war dance all by itself, as he had seen a similar article do at a seance when asked if the visiting spirit (Napoleon) missed the springtime sunsets of St. Helena. Jack Moore found Hugh energetically leaning from his couch and with both arms embracing and crushing the inoffensive object, in a ludicrous effort to stop its inexistent motion. [ . . . ] Jack Moore pried the two apart. Hugh silently turned over and went to sleep. (20-21)

これはヒューが大学に入って同級生のジャック・ムーア（親戚ではない）と一緒に新築のスナイダー・ホールの二部屋に下宿していたときだった。一日中詰め込み勉強でくたびれたジャックは、真夜中に寝室兼居間から聞こえてくるどたんばたんという音で起こされた。そこで彼は調べに行ってみた。ヒューは眠りの中で、三本足の小さなベッド脇のテーブル（廊下の電話台を失敬したもの）がひとりりでに勇ましい戦いの踊りを始めたのだと思い込んでいて、その踊りは降霊会の席でやってきた霊（ナポレオン）に対して、セント・ヘレナ島の春の日没がなつかしくはないかと質問したときに似たようなテーブルが見せたふる

まいとそっくりだったのだ。ジャック・ムーアがかけつけてみると、ヒューが必死になって寝椅子から身を乗り出し、じっとしているその物体を両手で抱え込んで押し潰し、ありもしない動きを止めようと滑稽な努力をしているところだった。(中略) ジャック・ムーアは両者を強引に引き離した。ヒューは黙って寝返りをうつと眠ってしまった。(33-34頁)

Jack Moore の後に“(no relation)”(親戚ではない)という説明がはいっており、第2章で同様に括弧内にあった Person の由来の説明を思い出す読者もいるだろうが、名前の由来と異なり、今回の「(親戚ではない)」は、初見の読者には何の話か全くわからないものである。読み進み、Julia Moore の名前をフルネームで見ることにより、「親戚ではない」の対象が Julia Moore であつたらしいという見当がついてくるが、括弧内の発言の主が誰か、Julia 本人か中心的な語り手である Mr. R を含めた彼女の関係者かは、最後まで謎として残る。

Jack Moore は小説のこの箇所に登場するのみであるため、彼が Hugh と同じ大学に行っており、学生寮のルームメイトであつたこと以外の情報がない。しかし彼はこの場面でなかなか重要な役割を果たしている。Hugh は降霊会の夢を見たらしく、三本足のテーブルに降りた Napoleon の霊と格闘しているつもりであり、Jack はそれを止めて Hugh を安全な日常の世界に戻した。実はこの小説全体が一種の降霊会のようなものであり、死後の世界から死者(たち)が生者の世界を見て語っているものであることの暗示がここで為されている。Jack Moore はその後 Hugh の人生との接点がなく、小説に登場することはない。しかし Nabokov の作品間にしばしば形成される間テクス的なつながりをたどると、降霊術を主題とした短篇“The Vane Sisters”(1959)において、降霊会で霊が語ったとされる情報の中に「彼ジョン・ムーアと弟のビルがコロラドの雪崩で死亡した」(627)というものがあり、Jack (John の愛称) Moore が関係している可能性を思わせる<sup>10)</sup>。

## 2. Julia Moore

Moore 一族の中心的存在が Julia Moore である。前景となる物語の上では、彼女は主人公 Hugh が編集者として担当する作家 Mr. R の義理の娘であり、Hugh と一度デートして性的な関係を持つ。Julia は、後に Hugh が結婚する Armande とは以前からの友人であったが、Hugh の結婚後は登場する機会がなく、物語の後半における小説の表舞台への登場は、Hugh の見間違いにより一瞬別人の姿の中に登場する程度となる。

彼女が Moore 一族の中心的存在であるのは、その名前の変奏により、様々な人物が小説の後景に、時には前景に登場するからである。

### 2-a *Romeo and Juliet*

Moore がアナグラムにより Romeo となり、Julia が愛称の Juliet となって、Shakespeare の悲劇 *Romeo and Juliet* (1597?, 以下 RJ) がこの小説に重なる。

この小説には、RJ を下敷きにしたと思われる部分がいくつか見られる。Hugh と Armande は、イタリアへの新婚旅行の際に Stresa の由緒あるホテルに宿泊する。ストレザはイタリア北部の湖水地方にあり、RJ の舞台となった Verona へも Milano 経由の鉄道で 2 時間ほどの距離にある。ストレザでの最後の晩に、二人は自主的に避難訓練を実施することになるのだが、そのバルコニーを使っての避難訓練に RJ のバルコニーの場がパロディとして隠れていると読める。

避難訓練は、エキセントリックで自己主張の強い Armande が、テレビでホテル火災のニュースを見たことから思いつくのであるが、Hugh にとっては悲惨な訓練となる。二人の宿泊している 4 階のバルコニーから、装飾の多い外壁をつたって 2 階へ、さらに渡り廊下の屋根へ飛び移るという計画で、Hugh は上から懐中電灯で照らしつつ、必要な場所で限界まで Armande を支える役割だった。Armande と婚約する前に彼が耐えた試練が、アスリートタイプの Armande とその取り巻きの青年達と共に、ゴンドラの乗り場までア



ルプスの山腹を登るというものであり、数回の落伍を経てようやく成功したのであった。今回の訓練は、その時の逆で岩場に見立てたバルコニーを暗闇の中で降りるというものである。重力への挑戦とそのヴァリエーションである落下が小説の小主題の一つを成しており、アルプス登山と共にバルコニーを使つての岩場下りもそこに属している。落伍を繰り返したアルプス登山同様、避難訓練も Hugh にとっては惨憺たる体験となる。

He badly messed up the exploit. He got stuck on a ledge just under their balcony. His flashlight played erratically over a small part of the façade before slipping from his grasp. He called down from his perch entreating her to return. Underfoot a shutter opened abruptly. Hugh managed to scramble back onto his balcony, still roaring her name, though persuaded by now that she had perished. Eventually, however, she was located in a third-floor room where he found her wrapped up in a blanket smoking peacefully, supine on the bed of a stranger, who sat in a chair by the bed, reading a magazine. (65)

せっきくの偉業がめっちゃめっちゃになったのは彼のせいだ。彼はバルコニーのちょうど真下にある出っばりで早くも動けなくなった。懐中電灯はファサードの狭い部分をやみくもに照らした後で、手元からすべり落ちた。たのむから戻ってきてくれ、と彼は高いところから呼びかけた。すると足下で錠戸が突然開いた。ヒューはやっとのことでバルコニーによじ登り、なおも彼女の名前を叫びつづけたが、もう死んでしまったものばかり思っていた。ところが、結局のところ、彼女が発見されたのは三階のある部屋で、毛布にくるまって落ち着いた様子で煙草を吸いながら、見知らぬ男のベッドで仰向けに寝ころがっていて、部屋の主はベッド脇の椅子に腰かけて雑誌を読んでいた。(104頁)

ベッドに横たわって平然と煙草を吸う Armande が、男性滞在客と関係をもった後であることは明らかである。避難訓練が途中から情事になってしまったわけだが、Armande にそこまでの計画性はなく、放縦な彼女にとってはよくある成り行きの結果であったことが想像できる。

Armande の行為は、知り合ったばかりの Romeo とバルコニーの上と下に離れて会話するだけの Juliet とは無関係に見える。Nabokov 作品における

Shakespeare からの引用について研究書を書いた Samuel Schuman も、Hugh と Armande の物語を Romeo と Juliet の若々しい純愛物語の反転像と考えている (Schuman 135)。しかしバルコニーでの語り合いの結果、その場で秘密結婚を決めてしまう 13 歳の Juliet の行動は、純愛による暴走と呼べるレベルのものだろう。ルネサンス期ヴェローナの幼い箱入り娘を 20 世紀後半の 20 代半ばのエキセントリックなセレブ系女性に置き換えてバルコニーに置いて眺めて見ると、Armande の強引な避難計画や脱線が Juliet の一途な大胆さに重なると見えてくる。

*JULIET reappears at the window*

*Juliet.* Three words, dear Romeo, and good  
night indeed.

If that thy bent of love be honourable,  
Thy purpose marriage, send me word to-morrow,  
By one that I'll procure to come to thee,  
Where and what time thou wilt perform the rite;  
And all my fortunes at thy foot I'll lay,  
And follow thee my lord throughout the world. (2.2.143-149)

• • • • •

*Juliet.* At what o'clock tomorrow  
Shall I send to thee?

*Romeo.* By the hour of nine. (2.2.166-168)

ジュリエット ロミオ、ほんの三言だけ、それで本当におやすみ。  
あなたの愛に偽りがなく、  
結婚を考えているのなら、明日あなたのところへ  
使いを出すわ、どこで、いつ式を上げるかをことづけて。  
そうしたら、私の何もかもをあなたの足元に投げ出し  
世界中どこへでも私の旦那様について行く。

(中略)

ジュリエット ロミオ！明日は何時に使いを？

ロミオ 九時に。

Juliet に会うまでは Rosaline という名のつれなき美女に夢中になっていた Romeo であるが、Juliet に一目惚れし、その晩に結婚の約束をする。そして翌朝には Laurence 神父のもとへ出向き、二人だけの秘密結婚式を挙げるに至る。一方、Juliet の父親は名門貴族の青年 Paris からの結婚申し込みを喜び、既に秘かに既婚女性となっている Juliet に彼との結婚を強制し、終いには結婚式を翌日に予定するという無茶ぶりを示す。劇的効果を狙ったプロットの不自然さは割り引いて考える必要があるが、男女を問わず独立するまでは親の支配下に置かれ、大人達の都合で自分の人生がいかようにも変化することが当然であるという劇中の前提状況は、当時の現実と大差がないであろう。Romeo と Juliet は、そのような時代背景があったため純愛の暴走に至ったわけである。ニューヨークやスイスのリゾートでエキセントリックな行動を繰り返す Armande や自由奔放に生きる Julia が当時のヴェローナに生きていたなら、Juliet 級の大胆さを示したであろうことは想像に難くない。ストレザの宮殿ホテルのバルコニーを舞台としたこのエピソードの結末には、バルコニーと地上とに別れつつも愛を告白しあい、結婚の約束に至る Romeo と Juliet のバルコニーの場面が、凝った形で織り込まれていると読むことができる。

小説全体における RJ の影響を考えると、主人公が共に事故や自殺で亡くなってしまおうという点があげられる。RJ では夫が誤解にもとづく服毒自殺、妻がわずかな時間差での剣による後追い自殺であり、結婚したばかりの二人の若さを考えると、劇中でも言われるように「これほどの悲劇はない」だろう。TT の場合には、妻が夢遊病の夫による殺害、夫が8年後のホテル火災での焼死であり、やはり二人ともに非業の死を遂げる。

また、RJ の悲劇は、Laurence 神父からの伝言を Romeo に届ける予定であっ

た神父が予期せぬ事件のため間に合わず、仮死状態の Juliet を死亡したものと信じた Romeo が服毒自殺を遂げ、目を覚ました Juliet が絶望して剣により自死するというものである。Armande の死は、後述のように、Hugh が見ていた火事の悪夢の中で窓から無謀な避難を試みる女性を助けようとして首を強くつかんだことが原因であり、夢の中での勘違いと不手際によるものである。また、小説の最後でスイスのホテルに宿泊中火事で死ぬ Hugh は、新婚旅行で泊まったストレザのホテルに移る予定であったが、そのホテルが修復工事中であったため、仕方なく連泊したスイスのホテルで非業の死を遂げることとなる。Hugh が予約を取ろうとしていたストレザのホテルは歴史ある宮殿ホテル Grand Hotel des Iles Borromees であるらしいが、彼はホテルの名を Beau Romeo (美男のロミオ) と記憶しており、重ねて RJ への関連を示している。

## 2-b Giulia Romeo

Hugh が見る火事の悪夢の中では、Julia と、Hugh が一度だけ客になった Geneva の街娼、そして殺害される Armande が合体して Giulia Romeo となる。街娼は、父が急死した日にジュネーブで会った若い娘でイタリア人風の目が印象に残ったことから、夢の中では、貧しい混血娘でアメリカ人の優しい Giulia として現れたものと推測される。現実には、Armande がベルギー人とロシア人の両親から生まれており、Julia がアメリカ人であるため、Giulia は、3人の合体した存在として夢に登場したことがわかる。火事で燃える家から落下しそうになっている Giulia を押しとどめようとして、Hugh は Giulia の実体である Armande を絞殺してしまう。引用は、事件後に Hugh が刑務所に勤務する心理学者に夢の内容を話している場面である。

Flames spurted all around and whatever one saw came through scarlet strips of vitreous plastic. His chance bedmate had flung the window wide open. Oh, who was she? She came from the past—a streetwalker he had picked up on his first trip abroad, some twenty

years ago, a poor girl of mixed parentage, though actually American and very sweet, called Giulia Romeo, the surname means "pilgrim" in archaic Italian, but then we all are pilgrims, and all dreams are anagrams of diurnal reality. He dashed after her to stop her from jumping out. [...] Giulia, or Julie, wore a Doppler shift over her luminous body and prostrated herself on the sill, with outspread arms still touching the wings of the window. [...] and poor Hugh did all he could to restrain Juliet. Trying for the best hold, he had clutched her around the neck from behind, his square-nailed thumbs digging into her violet-lit nape, his eight fingers compressing her throat. [...] What a fall! What a silly Julia! What luck that Mr. Romeo still gripped and twisted and cracked that crooked cricoid as X-rayed by the firemen and mountain guides in the street. How they flew! Superman carrying a young soul in his embrace! (80-81)

炎があたり一面に噴き出し、目に入るものはすべて、真っ赤な細い硝子状のプラスチックを透かして見るようだった。彼の一夜のお相手が窓を大きく開け放っていた。はて、そのお相手とは誰だろう？彼女は過去から来た女性であった—初めての外国旅行のときに捨てた街娼で、かれこれ二十年前のこと、貧しい混血娘、ただ実際はアメリカ人でとてもやさしく、名前はジューリア・ロメオ。苗字は古いイタリア語で「巡礼者」の意味だが、それを言うなら我々はみな巡礼者であり、あらゆる夢は毎日の現実のアナグラムにすぎない。彼はあわてて駆け寄り、飛び降りるのをやめさせようとした。(中略) ジューリア、もしくはジュリーは、燐光を放つ身体にドップラー<sup>せんい</sup>遷移をまとい、窓枠にうつぶせして、広げた両腕はまだ両開きの窓ガラスに触れていた。(中略) 哀れなヒューはジュリエットを必死に引き止めようとした。それがいちばんいいつかみ方だと思って、背後から首のまわりをつかむと、角ばった爪をした親指が紫色に照らし出されているうなじに食い込み、八本の指が喉を押しつけた。(中略) 何という転落！なんと愚かなジュリア！通りにいた消防士や登山ガイドたちがX線写真を撮った、あの曲がった輪状軟骨を、ロメオ氏がまだねじりあげて折れそうなくらいにつかんでいたのはなんたる幸運だったことか。(125-26頁)

夢の最後にヒューは Giulia (Julia, Julie, Juliet) の首をつかんだまま、スーパーマンのように飛び、現実の床に落ちて目覚め、妻 Armande が床に倒れて死んでいるのを発見する。夢の話聞いた心理学者が「最高傑作」と褒め、学

会での報告を予定するのをもっともであり、この部分は小説の中でとりわけ華麗なイメージを喚起する描写が連続し、「夢は毎日の現実のアナグラム」という言葉の通り、記憶と夢が変形して重なりながら奇妙に実体化を果たしている部分である。

RJ との関連で取り上げたストレザのホテルでの火事を想定した避難訓練が Hugh の夢の中で現実化したとも言えるだろう。当夜、役に立たない補佐役であった Hugh は、補償作用を持つ夢の中では、火事に脅えて飛び下りることしか考えられないか弱い女性を抱いて飛翔するスーパーマンとなる。引力や重力、さらに重力への敗北としての落下が小説の枠組みを形作る小主題の一つであるが、洋装店での試着中に発作で亡くなった Hugh の父がまるで高所から落ちて死んだ人のように描かれるのと同様に、Armande も高所から飛翔しつつ死んだかのように語られる。

## 2-c A Julie

列車で出会った Armande に恋をした Hugh が当日の日記に書きつけた“Ouvre ta robe, Déjanir that I may mount sur mon bûcher”「おまえの着ているものを脱いでごらん、デジャーニール、そうしたら私は薪の山に登ってもかまわない」は、Alfred de Musset の詩“A Julie”（1832, 「ジュリーへ」）からの引用であり、妻に毒を盛られた後、自ら火の中へはいつて死んだヘラクレス伝説を踏まえている（Boyd *Novels*, 813n）。以前の論文では、ここにカルタゴを創設した伝説の女王 Dido の死を見て、Hannibal のテーマに結びつけて論じたが<sup>11)</sup>、ここには Julia の変奏と焼死の伏線も潜んでいる。

## 3. Othello, the Moore of Venice

もう一人、Shakespeare 劇の主人公が隠れている。Othello がこの小説に登場することはないし、小説内でその名が語られることもない。この劇の台詞からの引用もないため、Schuman の研究書にも指摘がない。しかし Moore（ムー

ア人) という彼の呼び名と妻の絞殺により、その存在がイメージとして後景に現れる。

Othello の隠れた存在は、Hugh が Armande に近づき始めた段階から見出すことができる。Armande との初めてのデートに出かける Hugh が着る新品の洒落たタートルネックのセーターについて、トルコ製であることが購入時にことさらに報告される。『『トルコ製』とそのラベルがこっそり教えてくれた。』(70 頁)。セーター購入後に Hugh は偶然 Julia Moore と Armande を見つけるのだが、そこで買ったばかりのトルコ製のセーターと Moore を結びつける読者はまずいないだろう。しかし第 16 章の終わりで妻の殺害に関して刑務所に勤務するフロイト派の心理学者から受けた質問の中に、首を絞めつける窮屈なタートルネックのセーターに関するものが含まれていることにより (98)、読者の記憶の中でかつて見たトルコ製のタートルネックセーターが絞殺への伏線と認識され、Julia の姓である Moore を経由して Othello に行き着くという仕掛けが施されている。

Othello は妻を熱愛していたが、悪意ある部下に騙されて嫉妬にかられ、すべてを捨てて自分を愛していた清純な妻を殺してしまう。Hugh も妻を熱愛しており、彼女の不倫すら黙認していたが、いわば悪夢に騙され、結果として妻を殺害してしまう。Armande は Desdemona とは対照的に見える女性である。性的に放縦であり、気まぐれで奇行が多く、独身時代には、将来は著名なアスリートや富裕な青年と結婚するものと思われていた。しかし取り巻きの中で最も冴えない Hugh を選び、反対する母親とは絶縁したところに、父親の反対を押し切り、年齢差も人種の違いも無視して、はるかに年上の有色人男性と結婚した Desdemona との意外な近似性を見ることができよう。

Othello (1604) は、原題が *The Tragedy of the Moore of Venice* であり、ムーア人であることが劇の重要な要素となっている。Shakespeare 時代のイギリスにおける「ムーア人」は、アフリカ系、アラブ系、さらにはインド系をも含めての呼称であり、Othello の人種を特定することは困難とされる (Bartels 434)。

劇の初めに Othello は、当時 Venice 共和国領であった Cyprus の将軍として登場するが、キプロスは、古代より東地中海を往来する諸民族、諸文明の中継地となっており、人種民族の混淆度のとりわけ高い地域であることが人種特定作業をさらに困難にしている。

もっとも TT においては、Moore の姓とトルコ製のタートルネックセーターから *Othello* が導き出されることが重要であって、「ムーア人」の特定にはさほどの重要性がないかもしれない。「トルコ製」が問題になるのは、罪のない Desdemona を絞殺した Othello が真相を知り、剣によって自殺する場面の台詞のためである。

And say besides that in Aleppo once,  
Where a malignant and a turbaned Turk  
Beat a Venetian and traduced the state,  
I took by the throat the circumcised dog,  
And smote him, thus.

[*he stabs himself*]

(5.2.354-358)

それに加え、こうも  
申し上げる、かつてアレppoの街で、  
ターバンを巻いたトルコ人が、敵意をむきだしにして  
一人のヴェニス人に殴りかかり、国を侮辱するのを見た私は、  
その犬畜生の喉を引っ掴み、  
こうして一打ちのめしたと！ (自らを刺す)

この逸話に登場するのは、トルコ人、ヴェニス人、Othello の3人であり、ヴェニス人を攻撃する不埒なトルコ人を Othello が成敗したという話である。同時にこの場面では、罪のないヴェニス人に Desdemona が、トルコ人に Othello 自身が重ねられており、かつてヴェニス人を殴ったトルコ人を成敗したように Othello は自分自身を処罰するのである。Desdemona の殺害が



絞殺であったことは、Othello がトルコ人の喉を掴んだ部分に反映しているであろう。この部分では、トルコ人、ヴェニス人、Othello、Desdemona が複雑に絡み合い、TTにおける Giulia Romeo を彷彿とさせる。

Nabokov の短篇に “That in Aleppo Once . . .” (『かつてアレppoで……』, 1958) と題された作品がある。虚言を繰り返した妻の行方を追う夫が主人公兼語り手である。彼は、実りのない探索の後、結局妻は実在しなかったと結論し、自分を納得させる。この短篇は、主人公が Nabokov 自身を思わせる V という作家である友人に妻との顛末を報告している形であるが、最後に彼は V に、この話を小説にするなら、タイトルを “That in Aleppo Once . . .” としないよう忠告する。そのタイトルによってとんでもない含みが生まれることを恐れてのことである。結局読者が読む短篇はそのタイトルによるものであり、Othello に似た運命が語り手を襲った可能性が暗示される。しかも Othello の台詞の引用であることが引用符により明示されているタイトルとなっている。Nabokov が上で引用した Othello の最後の台詞にとりわけ興味を抱いていたことがこの短篇からもうかがわれる。

## おわりに

Person と Moore を中心に TT における固有名詞の機能に関してたどって来たが、言葉が自在に姿を変え、他の言葉と結び付くことで小説の意味を作り出し、登場人物を動かして行くという、Nabokov 作品においても特異な表現効果をいくつか見ることができた。

固有名詞に関しては、現段階においていくつか書き残したものがある。その中で特に重要と考えているのが、分析哲学者の G. E. Moore (1873-1958) が TT において果たしている役割である。Ludwig Wittgenstein (1889-1951) については小説内で一度言及があり、それを出発点として、Hugh の死に際しての語りとの重要な関連を中心に拙論で既に論じた<sup>12)</sup>。Cambridge 大学で

Wittgenstein の同僚でもあった G. E. Moore もやはり非常に大きな役割をこの作品中で果たしていると考えている。TT に隠された G. E. Moore の存在と機能について論じることが、筆者にとっての次の課題である。

### Notes

- 1) Boyd, “Nabokov,” 40.
- 2) 中田「物語の地下水脈—*Transparent Things*」, 「物語の地下水脈—*Transparent Things* II」, 「心霊的サブテクストを透視する—『透明な対象』」。
- 3) 中田「物語の地下水脈」95-96 頁参照。
- 4) *Transparent Things* からの引用は、Vintage International 版による。邦訳からの引用は、若島・中田共訳『透明な対象』による。
- 5) “Person, 3. French (mainly northeastern): reduced from of Per(r)esson, from a pet form [ . . . ] of the personal name Pierre, French form of PETER,” *Dictionary of American Family Names*.
- 6) 引用は、新共同訳『新約聖書』による。
- 7) 中田「物語の地下水脈」95-96 頁参照。
- 8) 中田「物語の地下水脈」93-95 頁参照。
- 9) 中田「物語の地下水脈」107-108 頁参照。
- 10) 中田「心霊的サブテクスト」128-29 頁参照。
- 11) 中田「物語の地下水脈」100 頁参照。
- 12) 中田「死と隠蔽—*Transparent Things* を中心に」, “Wittgenstein Echoes in *Transparent Things*.”

### Works Cited

- Bartels, Emily C. “Making More of the Moor: Aaron, Othello, and Renaissance Refashionings of Race.” *Shakespeare Quarterly*. 41. 4 (1990): 433-54.
- Boyd, Brian. “Nabokov as Storyteller.” *The Cambridge Companion to Nabokov*. Ed. Julian W. Connolly. Cambridge: Cambridge UP, 2005. 31-48.
- . “Notes.” *Nabokov: Novels 1969-1974*. New York: The Library of America, 1996. 786-824.

- Hanks, Patrick. ed. *Dictionary of American Family Names*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- Nabokov, Vladimir. *Transparent Things*. New York: Vintage, 1989. 『透明な対象』 若島正・中田晶子訳 東京：国書刊行会, 2002 年。
- . “That in Aloppe Once . . .” *The Stories of Vladimir Nabokov*. New York: Vintage International, 1995. 560–68.
- . “The Vane Sisters.” In *The Stories*. 619–31.
- 中田晶子 「物語の地下水脈—*Transparent Things*」 『南山短期大学紀要』 第 33 巻, 2005 年。91–112 頁。
- . 「物語の地下水脈—*Transparent Things* II」 『南山短期大学紀要』 第 34 巻, 2006 年。1–20 頁。
- . 「心霊的サブテクストを透視する—『透明な対象』 『書きなおすナボコフ, 読みなおすナボコフ』 東京：研究社, 2011 年。120–30 頁。
- . 「死と隠蔽—*Transparent Things* を中心に」 『英語青年』 1999 年 11 月号, 512–14 頁。
- . (Nakata, Akiko). “Wittgenstein Echoes in *Transparent Things*.” *The Nabokovian* 45 (2000) : 48–53.
- 日本聖書協会編 『新共同訳 新約聖書』 共同訳聖書実行委員会訳 東京：日本聖書協会, 1988 年。
- Schuman, Samuel. *Nabokov's Shakespeare*. New York: Bloomsbury, 2014.
- Shakespeare, William. *Othello*. Ed. Alice Walker and John Dover Wilson. *The New Shakespeare*. Cambridge: Cambridge UP, 1969. 松岡和子訳 『オセロー』 シェイクスピア全集 13 ちくま文庫 東京：筑摩書房, 2006 年。
- . *Romeo and Juliet*. Ed. Alice Walker and John Dover Wilson. *The New Shakespeare*. Cambridge: Cambridge UP, 1969. 松岡和子訳 『ロミオとジュリエット』 シェイクスピア全集 2 ちくま文庫 東京：筑摩書房, 2006 年。